

こころの玉手箱

公明党代表

太田 昭宏

2

大学生生活の楽しみの一つは部活動だろう。京大に合格したとき、入ろうと思っただのは軽音楽部だった。あこがれのテナーサックスを吹いてみたかったのだ。

部室を訪れると、お目当てのサックスの練習はまだ始まっていなかった。手持ちぶさたでいたところに背後から声をかけられた。「いい体格しているね。土俵が上がってみたら」

隣の相撲部の上級生だった。いったんは断ったが、相手は言葉巧みだった。「まわしをつけるなんて一生に一度のことかも。記念になるよ」

これには少しクラッとさせられた。引かば押せ。押さば押せの押し相撲が京大の伝統。正攻法の真っ向勝負だ。

た。まわしをしてみると、何となく身が引き締まる。思い切って上級生にぶつかっていくと、熱戦の末、相手を土俵の外に押し出すことができた。

「参った」「強いじゃないか」「大したもんだ」他の部員も寄ってきて褒めてくれた。すっかりいい気になって、サックスのことはこころりと忘れた。

相撲部に入ってみたら弱いはずの上級生の強いこと強いこと。わざと負けて勧誘する手口にまんまとはまったのだ。

「引かば押せ。押さば押せの押し相撲」が京大の伝統。正攻法の真っ向勝負だ。



相撲のまわし

卒業生に後輩が記念のまわしを贈る伝統だ

真っ向勝負の心養う

練習の厳しさは尋常ではない。まわしに血がにじむのは当たり前。いまだに体に傷が残る。当時四年生だった羽毛田信吾宮内庁長官らよき先輩に恵まれ、胸を借りた。

毎日二、三時間の練習を終えると、タオルを絞れない、自分の手が上がらない、そんな生活が半年ほど続いた。どんぶり飯十杯を食らう部員たちが通い詰めたご飯食べ放題の定食屋はあつという間につぶれた。

戦績は関西二部で優勝か二位。一部との入れ替え戦では歯が立たずに二部残留。そんな四年間だった。四年生のときはキャプテンに推され、十数人の部員のまとめ役を務めた。

平凡な感想だが、あのころの努力、完全燃焼の青春の日々が何ごとにも前向きに戦う心を養ってくれたような気がする。練習まわしは部員たちが代々継承していく。この写真のまわしは卒業時に後輩たちが記念に贈ってくれたものだ。